

## マリー・ローランサン —時代をうつす眼

アーティゾン美術館(京橋)

23. 12. 09～24. 03. 03



「マリー・ローランサン」(1883～1956)は、20世紀前半に活躍した女性画家で、キュビズムの画家として紹介されることも多いが、「前衛的な芸術運動」や「流派(イズム)」中心に語る美術史の中になかなか収まらない存在である。彼女自身は、自分に影響を与えた存在として、同時代の画家「マティス」「ドラン」「ピカソ」「ブラック」の名を挙げているが、彼らの様式を模倣することなく、“パステルカラーの独自の画風”を生み出した画家である。

本展では、「石橋財団コレクション」や国内外の美術館から、画伯の作品「約40点」、挿絵本などの資料「約25点」に加えて、画伯と同時代に活躍した画家たちの作品「約25点」と合計「約90点」を展示して、関連する多くの画家たちの作品と比較しつつ、彼女の作品の魅力を紹介している。

《三人の若い女》 1953年頃 油彩/カンヴァス 97x130.3cm 上図

10年もの歳月をかけて制作されたという作品は、画伯の集大成といっても過言ではない1点であり、激動の時代を生き抜いて世界中に「ローランサン・スタイル」を残した彼女の「当たり前でない」人生と、女性としての感性で、女性にしか創り出せなかった芸術を知らしめたことの全てが込められている。

<見どころ>

1. ローランサンの活動を多角的に紹介。
2. 同時代の芸術家との競演。
3. 国内外の作品が一堂に。



《手鏡を持つ女》



《帽子をかぶった自画像》



《プリンセス嬢》